

モノづくり なぜ海外

立国ニッポンが に出ざるを得ないのか

伊藤製作所社長
伊藤澄夫 中京大学大学院ビジネスイノベーション研究科客員教授
ソウル産業大学校金型設計科名誉教授

筆者が委員長を務める社団法人日本金型工業会国際委員会は今年二月、昨年度に引き続きインドネシアに視察団を派遣。単なる会社訪問ではなく、具体的に金型の輸出や合弁会社設立などの商談をする機会を設けた。

近年アジア諸国では急激に人気が出てきたインドネシアへの頻繁な訪問は、日本だけではなく台湾や韓国、マレーシアからも多いと聞く。連日のように訪問客があり、受け入れ側として大変負担がかかっていると伺った。

しかし日本金型工業会に対するインドネシア側の対応は毎回至れり尽くせりで、恐縮するほど。インドネシア工業省電機・通信工業局長や新聞社、インドネシア金型工業会会員各社、発注側の大手企業など、前もって計画を立てただき、多くの商談会が持てた。

残念ながら日本ではさまざまな理由により、あらゆる製造業の成長は今後、期待できないといわれている。そこでアジアの中でも最も成長している同国に絡むことで、大きな成果を期待できるのだ

ネシアの国民が怒るところか、歓迎されたことは日本にとって幸運であった。オランダの植民地になつて以来三百年間弾圧され、度々抵抗したがかなわなかったが、北方から来た自分たちと変わらない小柄な黄色い兵隊がわずかな期間でオランダ軍を撃破した。この事実が、インドネシア国民が日本を信頼・尊敬するきっかけとなったのであろう。

終戦の二日後、スカルノとハッタはスカルノの自宅で独立宣言をした。敗戦後の元日本軍兵士は連合軍の目を盗んで陸軍の使つていた半数以上の武器を彼らに引き渡し、しかも千五百人以上の元日本兵は帰還船に乗らずに現地に残留し、インドネシアの兵士に武器の使い方などを教育、一緒に独立戦争を戦った。四百人ももの日本兵士は戦死したが、四年余りかかった戦争で遂に独立することができた。

このように歴史的な背景によってできた両国の信頼関係は今後も継続するであろう。私は当社の海外事業担当者、「単に語学の勉強にとどまらず、その国の文化や

が、これは日本側だけにメリットがあるのであろうか？ 筆者は五年連続で同国を訪問、さまざまな情報を得た結果、同国の同業者や発注側大手企業も日本の進出に大きな期待を持っているとの確信を得た。工業省電機・通信工業局長のC・トリハーソ氏は、同国の現状の説明とともに日本の幅広い製造業の進出への期待を語った。

では、わが金型工業会会員がインドネシア進出を検討する場合の優位点は何か。

- ①二億四千万人の人口による国内マーケットの大きさと、若者の比率が高い人口構成の労働力。
- ②石油やガス、各種の鉱石など天然資源に恵まれていることで、今後この国の成長は止まらない。
- ③同国政府は国の発展において金型産業がいかに大切かを理解している。金型の輸入は現時点でも非常に多い。特に精密金型や順送り金型製作会社はないに等しい。
- ④バイクの生産は年間九百万台といわれ魅力的なボリュームである。
- ⑤長期間の教育を必要とする金型企業は親日の国でなければ成功は

宗教、近代史のあらましも勉強した方が良い」と伝えている。

中小製造業が海外進出するにあたり最も問題となるのは資金でも技術でもない。派遣できる優秀な技術者の不足がハードルになる。当社も同様に海外に派遣できる人材が豊富ではない。優秀な人材を派遣したことで本社にブレーキが掛かるとすれば意味がない。今回インドネシア進出を検討できる理由は、フィリピン子会社に現地に送り込めるレベルの技術者がそろったことにある。

日本本社の技術者と比較すれば多少見劣りするとしても、彼らは語学力という強い武器がある。通信手段が進歩した現在、高度な技術を日本から伝えることは容易であり、現地の得意先に競争力のある見積価格を提出できることは、計り知れない武器となる。

日本の技術は今でも世界のトップクラスだと断言できる。現実には大苦戦が続くが、これは国がモノづくりや国際競争力のあり方を理解していないからに尽きる。行政が企業をサポートするのが本

難しい。その点、インドネシアは日本のことを世界で最も信頼できる国であると考えている。車の90%、バイクは99%が日本製だ。海外事情に詳しいと自負していた筆者だが、インドネシアがこれほど親日の国であったとは知らなかった。魅力的な日本の工業製品を使つたからとか、進出した日系企業の駐在員が素晴らしいからだから親日になったのだろうか。それも一部の理由であろうが、両国の歴史的な背景が大きな要素であろう。

一九四二年二月、日本陸軍はスマトラ島のパレンバン市に空挺部隊の落下傘降下作戦を行い、ロイヤル・ダッチ・シェルの製油所と滑走路、油田を無傷で手に入れた。四一年よりアメリカから原油の輸入を全面的に止められたため、パレンバン市からガソリンや原油を調達するのが目的であった。翌三月にはジャワ島に五万五千人の日本陸軍が上陸し、わずか十日間でオランダ軍を降伏させた。

許可を得ずいきなり他人の家の座敷に土足で乗り込んだような行為であったが、この作戦にインド

来だが、現実には規制やあらゆる法律がそれを妨げている。この国で事業を続けられることを期待したいが、日本の政治家レベルでは残念ながら近隣諸国に取り残されつつある状況を一掃する力量を持つリーダーがいなのが残念である。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長・中部支部長、中京大学大学院ビジネスイノベーション研究科客員教授、国立ソウル産業大学校金型設計科名誉教授、神戸大学非常勤講師、四日市機械金属工業団地協同組合理事長を務め、著書に『モノづくりこそニッポンの砦』がある。